

ダンテ・釋 逍空比較論序説

An Introduction to a Comparative Study on Dante Alighieri and Shaku Chokū

久志本 秀 夫

ダンテ・アリギェーリ（一二六五〜一三二一）がイタリアの国民詩人であるということは何人も否定しないであろう。

一九六五年（昭和四〇）はダンテ生誕七百年祭が、イタリアの国家的事業として祝われた年であった。この年には、まず三月三十一日に



「ダンテ展」カタログ表紙。絵はフランス・ロマン派の巨匠ドラクロワ「地獄におけるダンテとウェルギリウス」（パリ、ルーブル）より。1965年10月発行

ローマのカンピドットリオ（古代のカピトルの丘）で、祝典開始の式が行なわれ、ローマ市長と文部大臣の演説があり、共和国大統領のメッセージが読まれた。その後、ローマ、フィレンツェ、ヴェローナ、ラヴェンナ、ピサ、カセルタ、ベネヴェント、カッシーノ、サレルノ、ナポリなどで学会が開かれた。また各地で展示もあったが、最終の行事として、ローマのパラッツォ・ヴェネツィアで *Mostra Nazionale Dantea*（国主催のダンテ展）が十月二十一日より開催されたのである。

予定では十二月三十一日迄であったが、好評のためか会期は一月九日（日）まで延長された。

筆者は昭和四十年十二月末、ハバロフスクよりモスクワに飛び、新年はソ連の首都で迎えた。そしてワルシャワ、ウィーンを経由してローマに直行した。北伊パドヴァで中世・ルネサンス史を研究するのが本来の目的であるが、まずイタリア外務省に出頭するためであった。

所用も終え、ローマを離れる直前、フォロ・ロマーノ（古代のフォル

STORIA DELLA CRITICA, COMMENTI, EDIZIONI,
TRADUZIONI, BIBLIOGRAFIA

- 233 Profilo della critica dantesca (*A. Vallone*).
245 Edizioni e commenti delle opere di Dante (*E. Esposito*).
257 Traduzioni di opere dantesche (*E. Esposito*).
273 La critica dantesca dal 1921 al 1965 (*E. Esposito*).

LA MOSTRA DANTESCA

- 295 Sottocomitato per la mostra.
296 Ringraziamenti della Presidenza.
299 Significato e contenuto della Mostra (*E. Navarra*).
307 Catalogo.

CELEBRAZIONI DANTESCHE IN ITALIA E ALL'ESTERO

- 335 Celebrazioni dantesche in Italia.
338 Celebrazioni dantesche all'estero.
345 Indice generale.
349 Società dantesche in Italia e all'estero.
350 Comitati della Società Dante Alighieri in Italia.
355 Comitati della Società Dante Alighieri all'estero.
360 Istituti Italiani di Cultura all'estero.
362 Lettorati Italiani all'estero.

INDICE GENERALE

- 5 Messaggio agli Italiani del Presidente della Repubblica Giuseppe Saragat in occasione della cerimonia di apertura delle Celebrazioni Dantesche.
- 10 Discorso del Ministro della Pubblica Istruzione Luigi Gui in occasione della cerimonia di apertura delle Celebrazioni Dantesche.
- 13 Comitato Nazionale per le Celebrazioni del VII Centenario della Nascita di Dante.
- 16 Sottocomitato per la Mostra Nazionale Dantesca di Roma.
- 17 Introduzione (*U. Parricchi*).
- 19 I collaboratori del volume

IL TEMPO, LA VITA E LE OPERE DI DANTE

- 23 Prospetto cronologico della vita di Dante e dei tempi suoi(*E. Esposito*).
- 29 Esilio di Dante (*B. Sanminiatielli*).
- 47 La Commedia e le opere minori (*N. Sapegno*).

CONTRIBUTI CRITICI E FILOLOGICI

- 91 Sviluppo dell'arte e del pensiero di Dante (*B. Nardi*).
- 109 Dante e il mondo classico (*E. Paratore*).
- 131 L'esperienza religiosa di Dante (*G. Petrocchi*).
- 137 Il pensiero teologico di Dante (*G. Fallani*).
- 149 Il pensiero politico di Dante (*P. Brezzi*).
- 159 Dante e l'arte del suo tempo (*E. Carli*).
- 171 Dante e l'arte figurativa (*F. Ulivi*).
- 191 La lingua di Dante oggi (*A. Pagliaro*).
- 211 Dante e noi (*F. Bellonzi*).

TESTIMONIANZE

- 221 Dante al lume d'oggi (*G. Ungaretti*).
- 225 Saint-John Perse.
- 227 Thomas Stearns Eliot.
- 229 Thomas Mann.

ム・ローマヌム。古代ローマの政治宗教の中心地)を外部より見て写真を撮り、北に向って偶然パラッツォ・ヴェネツィアの前を通りかかりダンテの展示があることを知って入館した。その日が最終日の一月九日であり、筆者が一覧できてカタログを購入し得たことは幸せであったといえよう。

展示は、ダンテの家系図に始まり、神聖ローマ帝国とローマカトリック教会の主たる人物(いずれもダンテもしくは「神曲」に関連)を絵画、モザイク、彫刻等で見せた上、*La fortuna di Dante nel mondo* (全世界におけるダンテの運命)というセクションで「神曲地獄篇」の冒頭の三連句を各国語でどのように訳されているかを我々に教える。更にダンテのローマ理念、イタリア理念という部門では、彼の理想とした諸人物が示される。書簡、写本、「神曲」の諸版は多数展示されていたが、美術の面ではダンテ像は勿論のこと、ロダンの「神曲」によるデッサン八点もあった。筆者にとっては、ジオットーの「聖ステファノ像」(註1)が特に印象的であった。

このダンテ展のカタログ(註2)は三六三頁の大冊で、資料価値も大であるので前頁に *indice generale* (総索引の意であるが、実際には総目次)をかかげた(註3)。各項目の左端の数字はページをあらわす。

先程述べたジュゼッペ・サラガット大統領のメッセージは五頁に、ルイージ・グイ文部大臣の演説は十頁にある。

「ダンテ展」の解説と展示目録は二九五頁以下にあり、それまでは

ダンテその人に関する各方面よりの論文が並ぶ。

- 23頁「ダンテとその時代の年代学的概観」(E・エスポジト)
- 29頁「ダンテの追放」(B・サンミニアテルリ)
- 47頁「神曲と他の小品」(N・サペーニョ)
- 91頁「ダンテの芸術と思想の発展」(B・ナルデイ)
- 109頁「ダンテと古典世界」(E・パラトリー)
- 131頁「ダンテの宗教体験」(G・ペトロッキ)
- 137頁「ダンテの神学思想」(G・ファラーニ)
- 149頁「ダンテの政治思想」(P・プレッツィ)
- 159頁「ダンテと同時代の芸術」(E・カルリ)
- 171頁「ダンテと造形美術」(F・ウリーヴィ)
- 191頁「現代におけるダンテの言語」(A・パツリアーロ)
- 211頁「ダンテと我々」(F・ペロンツィ)
- 221頁「今日の光に照明されたダンテ」(G・ウンガレッティ)

一見して分るように、単なるカタログを越えた総合的研究の書ともいえるのである。

次にサン||ジョン・ベルス(註4)、T・S・エリオット(註5)、トーマス・マン(註6)のダンテに対するコメントがあり、233頁よりA・ヴァーローネの「ダンテ批評の側面」が続く。245頁よりE・エスポジトのダンテ著作作品の諸版と註解とが列挙される。同じエスポジトのダンテ作品

の翻訳の目録が続くが、日本よりは山川丙三郎、中山昌樹、平林初之輔、竹友藻風、北川冬彦、野上素一等の方々の名が挙げられている。273頁より始まる一九二一年より六五年に至るダンテ参考書目は十七頁にわたっている。そして、ようやく「ダンテ展」の解説が始まるのである。

* * *

ダンテ・アリギエーリの生涯を、前掲カタログ中のエスポジト作製の年表を中心に概観する(註)。

一二六五年五月の終り頃、フィレンツェのポルタ・サン・ピエトロ区にダンテ・アリギエーリが生まれた。父は二代アリギエーロ、母はベルラ。高貴の家柄ではあったが、既に没落ともいえる状態であった。父は教皇派に属していたが、これは小貴族や職人階級に通じる傾向であった。

一二七四年、ダンテ九歳の時、八歳のベアトリーチェ・デイ・フォロコ・ポルティナーリに会う。九年後、彼女に再会し、ベアトリーチェより優しく挨拶される。彼女に愛情を感じ、最初のソネットを書く。

返言して思ひを我に知らせよとて

わがこの言の葉の訪れむ

すべての恋ふる魂や雅心に幸ひあれと

ダンテ・釋逍空比較論序説

その主なる(愛)の名によりて祈ぐ。

星みな燦やかなる時の間の

三の一はゞ過ぎしころ

(愛) ふとわれに現れぬ、

そのさま憶ひ出づるも恐ろし。

(愛) は悦べるごとくに見えぬ、

手にわが心あり、腕には織物に

裏まれてわが淑女の眠れるありき。

かくて呼び醒しつゝ、謙りて、

この燃ゆる心をば、恐るゝ女に食はしめ、

後泣いて去り行けり。

(山川丙三郎訳)(註)

このダンテの最初の詩を、清新体派の詩人グイード・カヴァルカンティ(註)は美事だと賞したという。

一二九〇年六月八日、ベアトリーチェ歿。以後、ダンテは哲学に慰めを見出す。

一二九二年より九三年にかけて *Vita Nuova* (「新生」) を完成。

しかしダンテという人物には文学の才能の他に政治的才能があったとみえ、党派争いの激しいフィレンツェの政界に活躍の場を見出していった(註)。当時、フィレンツェを圧えていた教皇派は二つに分れ、

五

白党 (Bianchi) と黒党 (Neri) を名のつて争っていた^{註四}。ダンテは白党に属した。

一二九六年五月より九月までダンテは財政を審議する百人評議会の一員であった。一三〇〇年五月には、トスカーナ地方の教皇派を強化するための大使としてサン・ジミニャーノに派遣されている。同年六月十五日より八月十五日までプリオーレの一人であった^{註五}。

教皇ボニファキウス八世 (在位二九四〜一三〇三) は、フランスよりシャルル・ドゥ・ヴァロワを招き、その武力によってイタリアを制圧しようと試みた^{註六}。そこでフィレンツェは一三〇一年の秋、ダンテ他二人の使節を教皇庁に派遣し、黒党を援助してフィレンツェ支配を企む教皇庁と交渉させた。十二月一日、シャルルはフィレンツェに入り、黒党に政権を取らせる。

一三〇二年、一月二十七日、長官の名によりフィレンツェ留守中のダンテその他四名に罰金刑が課せられる。これに応じなかった為、三月十日、永久追放に処せられ、以後故国フィレンツェに帰ることはなかつた。

一三〇四年より八年にかけて「神曲・地獄篇」「俗語論」「饗宴」が書かれた。一三〇七年より八年に、「帝政論」も執筆されたと思われる^{註七}。

一三〇八年〜一二年、「神曲・煉獄篇」が執筆される。

一三二〇年十月、神聖ローマ皇帝ハインリヒ七世 (在位一三〇八〜一

三) が、イタリアにおける帝権回復を目的に進軍。ダンテは皇帝による全イタリア統一を夢みて精神的援助に努めた。「帝政論」はこの時期の作とみる説も多い。しかるにハインリヒはシェーナ附近のブオンコンヴェントにて一三二三年八月二十四日急逝。ダンテの希望は消滅した。

一三一五年、保証金その他の方法でフィレンツェに帰る機会があったが、ダンテはそれも拒否して放浪生活を続ける。

一三一八年、ラヴェンナの君主ガイド・ノヴェルロ・ダ・ポレンタの招きで、その地に移る。今や名声を得ていたダンテは、ラヴェンナで厚遇され、始めて安住の地を見つけたといえよう。一三二一年、ヴェネツィアへ使いた後、九月十三日深更または十四日の暁闇、熱病にて死ぬ。五十六歳。墓はラヴェンナの聖フランチェスコ教会の側らの小祠に安置されている。「神曲・天国篇」は一三一六年より二一年にかけて書かれたものである。

さて、ダンテに比肩すべき、日本の国民詩人は誰か。筆者は釋逍空の名を挙げるものである。逍空については語る前に、次の詩(あるいは長歌)を朗読して戴きたい。

遠野物語^{註八}

大正の三とせの冬の

困のふく日なりけむ。

駿河臺を 神保町によこをれて
入り来るあたり、

今の如 家潔からず。

町並みは 低くつゞきて、
家毎に物買ふ聲の高だかと
道に響きし。

あはれ その軒陰占めて、
露店ぞ 牀を列並め、町尻へ遠くひしめく。

ふらんけつと赤く濁れる、

はた 青の 黄に褪色りたる

押し張りて牀をくみたり。

そのうへに 積める古書。

ある群れは高くそりて、

ある群れは低くなびきて、

推さ 塚をなしたり。

これ五錢 それぞ拾錢

こゝもとは拾五錢など

ダンテ・釋道空比較論序説

おのもく盛りてわかてる書のうへに

薄日流らへ、

衝風 沙吹きこぼす。

沙風のひと時たゆみ、

夕つけて 互えつり来る

軒の端の 一つの店の、

かんでらも いまだ照り出せず ぶすぶれる

油煙の底の ほのかなる明りの照りに、

我はもよ 見いでたりけり。

これの世の珍寶

我が爲の道別きのふみ。

握りもつ白銅ひとつ

商びとに價とくれて

狂しき人 とか見らむあき人の 心も覺らず

書塚の中なる一つ

桃花鳥色に匂へるものを、

取り奪ひ逃ぐるが如く、

町角に来たりし時に、

がす燈のもとに佇み、とゞろける胸うち鎮め、

とり出で、ねもごろ 我が見つー。

清かりし表紙やつれて、書の背まろくすれたり。

然はあれど、目にしむものは、

うち開くべいじの面オモテ

つしやかにおしたる活字。

その文字の落ち居のよさやー。

文字と文字、さやかにかなひ、

くだりく清く流れぬ。

何處なる 誰とふ人の

讀みふるす書にか あらむ

持ち出で、かく 賣るべしやー。

末ずゑは、べいじも截らず

さながらにおきし幾枚ヒト。

指もて我は截りつゝ

立ちながら讀めりー幾枚ヒト。

喜びは濁汐ツツシなして うつそみの 心ゆすりぬー。

風の音の 遠野物語。

東京に侘びつゝ住めば、

頻々に戀しシク、コホ ふる里。

明日もかも 國に還らむ。

今日らもや 親は待つらむ。

かにかくに思ひ惑ひしそのかみは いぶせかりしか。

昔ぞ苦しかりける。

とをなから、五錢がせにと

辱む人あらば名のらせ。

乏しらの錢の中より、

我が憑む師のつくり書フミ

買ひ得たる我が喜びを

そしる人 もし世にありやー。

物語書かしゝ大人のみ面オモテすら

いまだ知らずで、おもかげに戀ひける時に、

ゆくりなく我がえし み書、

膝におき つくゑに伏せて

歎息せしことぞ 幾たびー。

早池峰の雲とそりて、

猿个石の端オモテちと深く

仰ぎ見も、俯シみも及かねー。

三分^{サシブ}しんのらんぶ擧^カ上げて、
さ夜深く讀み立つ聲の わが聲を
屢々^{シツ、}ひそめ、

若ければ、涙たりけり。遠野物語のうへに

反 歌

ものがたり あはれに告げし 遠野びと過ぎ
て聞えず。そのこわねすら

一読、その調子の雄渾さに魅せられぬ者はないであろう。現代の柿本人麿と激賞されているのも当然といえよう(註16)。

「遠野物語」は『古代感愛集』の中の一編である。この書は詩集か、はたまた長歌集か、ひとは迷うのではなからうか。しかし俳句も詩、短歌も詩なら、長歌もまた詩である。詩集『古代感愛集』(一九四七年初版)(註17)は、日本近代詩の概念を越えた所に位置するので、いまだに近代詩の歴史の中では正当に評価されていない。詩壇よりは「長歌集」と、歌壇よりは「詩集」と見なされて、それぞれの領域外とされているのではないか(註18)。

しかし、そもそも釋^{しやく}逍^{くちよう}空^{くう}・折^{をり}口^{くち}信^{しのぶ}夫^お(一八八七―一九五八)という人物を規定する語はないのではなからうか。歌人、詩人、国文学者、民

俗学者としては、いずれの分野でも超一流である。その上、小説『死者の書』(一九四三年初版)は日本の近代小説の枠をはみ出して、独自の位置で光を放っている。

ダンテ・アリギエーリは『神曲』に自己の世界観、歴史観、古典の教養など、全てを投入し、類いまれなる美の世界を現出した所に国民詩人として慕われていると思う。しかも『神曲』をイタリア語で書いたことにより、現代イタリア語の祖として尊敬されているのである。

釋逍空の『死者の書』は小説であり、かつ散文詩である。そこに逍空は自己の学問を全て投入し、中将姫伝説を基盤として、天平の世を再現した。更に『死者の書』『古代感愛集』に続く『近代悲傷集』がある。日本語の美しさの極致が、これらの書物に存在すると筆者は思う。これらの書とダンテの『新生』『神曲』との対比こそ、筆者の目ざす所であるが、次回に譲ることにして、ここでは先程の「遠野物語」と逍空の生涯に触れることで序論を閉じることにしたい。

* * *

柳田國男^{やなぎたにを}(一八七五―一九六二)の『遠野物語』(一九一〇年初版)が日本民俗学の出発を告げる記念すべき書であることは周知の事柄である。明治四十三年六月、東京、聚精堂より三百五十部の限定出版がなされた。遠野出身の佐々木喜善(一八八六―一九三三)よりの聞き書きということになっているが、柳田は稀代ともいべき名文でもって、学問と芸術を融合した書を世に送ったのである。

「昨年八月の末自分は遠野郷に遊びたり。花巻より十餘里の路上には町場三ヶ所あり。其他は唯青き山と原野なり。人煙の稀少なること北海道石狩の平野よりも甚だし。……猿ヶ石の溪谷は土肥えてよく拓けたり。路傍に石塔の多きこと諸國其比を知らず。高處より展望すれば早稲正に熟し晚稻は花盛にて水は悉く落ちて川に在り。……

天神の山には祭ありて獅子踊あり。慈にのみは軽く塵たち紅き物聊かひらめきて一村の緑に映じたり。獅子踊と云ふは鹿の舞なり。鹿の角を附けたる面を被り童子五六人劍を抜きて之と共に舞ふなり。笛の調子高く歌は低くして側にあれども聞き難し。日は傾きて風吹き酔ひて人呼ぶ者の聲も淋しく女は笑ひ兒は走れども猶旅愁を奈何ともする能はざりき。」(初版序文より)

その名文の一端が窺われるであろう。『遠野物語』には、家の神、山の神、天狗、山男、神陰しの話などが語られるが、日本民俗学は単なる趣味の学問ではない。常民の習俗、伝承を通して生活の古典を知り、引いては常民を幸福にする為の「新国学」であることを了承して戴きたいと思う(註19)。

さて、釋逍空・折口信夫は柳田國男を師と仰ぎ、民俗学の方法を国文学に導入していわゆる折口学という学問体系を創出した。柳田の方法が現在より過去へさか上っていくのに対し、折口は過去より現在に下って来るという方法を取ったので、両者は師弟でありながら、かつ独立独行していたのであった(註20)。

しかしながら、青年折口が『遠野物語』を入手した喜びは長歌「遠野物語」でよくうたわれている。一九三五年(昭和一〇)『遠野物語』が「拾遺」を加えて再刊された時、折口信夫は後記を書いて、師の還暦記念出版を祝った(註21)。

* * *

釋逍空・折口信夫は一八八七年(明治二〇)二月十一日、大阪府西成郡木津村市場筋(現、大阪市浪速区鷗町一丁目)に、医と薬種を業とする家の五男として生れた。幼時より国文学への思いあり。大阪府立天王寺中学校を経て国学院大学に進む。一九一〇年(明治四三)七月に卒業して大阪に帰る。翌年十一月、大阪府立今宮中学校の囑託教員として第四期生に国語、漢文、第五期生に国語を教える(註22)。

一九一三年(大正二)三月、柳田國男は民俗学研究の機関誌『郷土研究』を創刊。折口信夫は「三郷巷談」なる故郷木津の習俗を中心とした報告を寄せる(註23)。同年十二月、折口の報告が『郷土研究』に載る。

一九一四年(大正三)三月、教師の職を辞して上京。折口のあとを追って今宮中学第四期生数名も上京し、東京帝国大学赤門前の下宿屋昌平館に同居した。その中から大成した人に天文学者萩原雄祐(註24)がいる。また鈴木金太郎(註25)は一九三四年(昭和九)まで独身の折口を助けて折口家のしまりをした。

なお、この年、大正三年の冬の一日に稀観本『遠野物語』を神田の

露店で求め、民俗学への傾斜を強める。そして、のち、「遠野物語」なる長歌を生むに至るのである。

一九一五年（大正四）、『アララギ』十月号に「切火評論」が掲載される。以後、アララギの歌人たちとの交流がしげくなる。歌人釋迢空としての本格的な活動が始まったわけである。この年に初めて柳田國男に会った。

一九一六年（大正七）、定職のなかった折口はいよいよ窮迫したが、友人武田祐吉の勧めで萬葉集の口訳を始める。同年九月、国文口訳叢書の第三巻として『萬葉集』上巻が出版された。『口譯萬葉集』として、今も親しまれている^{註28}。

一九一九年（大正八）一月、国学院大学講師となる。長い不遇時代が終わったわけである。時に数え年三十三歳。折口が国学院に職を得るためには、国語学の師三矢重松（一八七〇〜一九二四）の援助があったという。

民俗学の師柳田國男は、一九二〇年（大正九）九州・沖繩に旅行し「海南小記」という紀行文を朝日新聞に連載^{註29}。折口は一九二一年（大正一〇）七月より八月にかけて沖繩に渡る。その地に古代の日本が生きていることを実感し、学問領域を広げる。同年九月三十日、国学院大学教授に昇進。

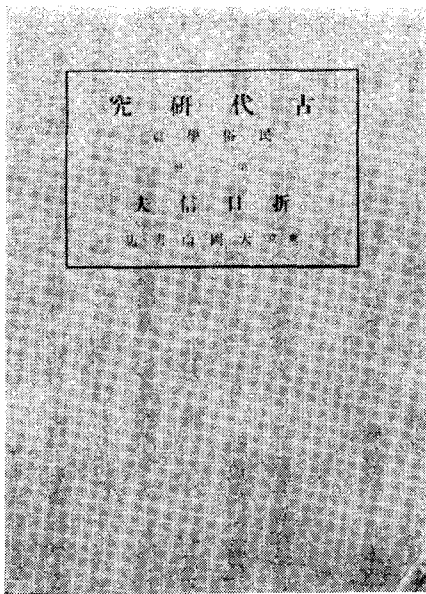
一九二三年（大正一二）七月十七日、三矢重松歿。三矢を深く敬慕した折口は、「三矢重松先生一年祭々文」に始まり、歌碑除幕式、二

十年祭、二十五年祭、三十年祭の祝詞を書いた^{註30}。特に三十年祭は折口信夫が病歿した一九五三年の十月十七日、鶴岡市春日神社境内の三矢重松歌碑の前で執り行なわれた。折口は「死の床」にしながら、最後まで祭文の推敲をしていたという^{註31}。

一九二四年（大正一三）、歌人古泉千樞の勧めで『日光』同人となり、創刊号に「日本文学の発生」を掲載。

一九二八年（昭和三）四月、慶応義塾大学文学部教授となる。しかし国学院は折口を離さず、国学院大学教授の肩書きもそのままであった。

一九二九年（昭和四）四月、大著『古代研究』民俗学篇1及び国文学篇が刊行された。翌年六月に出された民俗学篇2と合わせて、折口



『古代研究』民俗学篇1のブックケース。
昭和4年4月発行



『死者の書』初版青磁社本表紙
古代エジプトのミイラの棺の色刷
りが白地の表紙に貼付されている。
昭和18年9月発行

古代学と称すべき新しい学問の集大成であった。一応、民俗学篇と国文学篇とに分けられているが、ここでは民俗学は国文学に、国文学は民俗学に援用されて折口語彙ともいうべき「水の女」「神の依代」^{よひよ}「萬葉びと」などの学説が展開されている。また「国文学の發生」論は生涯のテーマでもあった。天性の鋭い直観が、事の本質を見分けていくのである。

一九三二年（昭和七）三月、『古代研究』の中の萬葉集をめぐる論考が認められ、文学博士の学位が授与された。その後の数年間は、学問、芸術、生活が安定し、幸福な一時期を過しえたといえるだろう。しかし、戦争の影響は次第に折口信夫の生活に暗影を投じて行く。

一九三九年（昭和一四）一月、「死者の書」第一回を『日本評論』に掲載。引き続き二月、三月号に続篇を発表。

一九四一年（昭和一六）十二月八日、大東亜戦争勃発。
一九四三年（昭和一八）九月『死者の書』を青磁社より出版。

鈴木金太郎が大阪へ帰ったのち、ひとり折口家に残って師の世話をしていたのは、能登一ノ宮出身の藤井春洋であった。しばしば応召され、軍役に服したが、この年の九月、戦いたけなわなる時に金沢の連隊に入隊した。翌年（昭和一九）七月、硫黄島に着任。七月二十一日、柳田國男、鈴木金太郎を保証人として藤井春洋を養子入籍。「折口」の印鑑を現地に送る。

一九四五年（昭和二〇）、三月一日、硫黄島の日本軍全滅。三十一日、全員玉碎との大本営発表あり。後継ぎとたのむ子を戦争で失った折口晩年の苦悩がここに始まる。

八月十五日、終戦の詔勅下る。

昭和廿年八月十五日、正坐して^{註30}

大君の宣りたまふべき詔旨^{ミコトノ}かはし。然るみことを われ聴かむとす
戦ひに果てしわが子も 聴けよかし。かなしき詔旨^{ミコトノ} くだし賜ふ
なり

大君の 民にむかひて あはれよと宣らす詔旨^{ミコトノ}に 涕^{ナミダ}嚙みたり
戦後の折口信夫の生活は寂しかったが、そこから「近代悲傷集」

『人間』昭和二十一年二月号）の名詩が生れて来たのであった^{註31}。

一九四七年（昭和二二）『人間』一月号〜三月号に「日本文学の發生」を発表。十月「日本文学の發生序説」を刊行。

一九四九年（昭和二四）七月七日、能登一ノ宮に折口春洋の墓碑を建立、除幕式をとり行なう。

もつとも苦しき

たゝかひに

最くるしみ

死にたる

むかしの陸軍中尉

折口春洋

ならびにその

父 信夫

の墓

一九五二年（昭二七）九月に軽い脳溢血の如き発作があった。それは胃癌と関係なかったのか。翌年（昭和二八）七月より八月にかけて箱根に滞在したが、健康とみにすぐれず。

八月二十九日、山を下る。三十一日、慶応病院に入院。九月二日、胃癌と診断。三日、午後一時十一分永眠。享年六十八歳。

十二月十三日、能登の父子墓に遺骨を埋葬。大阪木津願泉寺の累代之墓にも分骨が埋葬されている。

* * *

ダンテ・釋迢空比較論序説

上來、述べて来たことに対し、釋迢空・折口信夫を過大評価しているのではないかという疑問を提出する人もあるだろう。

そこで筆者は同時代の詩人佐藤春夫（一八九二—一九六四）が、迢空逝去の三年前に最高ともいふべき評価を与えている証跡を挙げて稿を終る。

『鑑賞抒情名詩選』は佐藤春夫、島田謹二、吉田精一の共著で、昭和二十五年五月三十一日、天明社の発行である。訳詩集「於母影」に始まり、明治より大正、昭和に至る代表的抒情詩が紹介され、それぞれ解説が付されている。最後に紹介される詩人が釋迢空であり「獨逸には生れざりしも」と「律」の二つの詩が引用される。ここでは天明社本の全文を掲げ（註³³）、佐藤春夫の解説を全部掲載する。

獨逸には生れざりしも（註³³）

あはれ 我がめづる

り、り、の集——。

ひとの集ゆゑに 悔いなくて

我は 読みけり——

この年の いたるまで——。

この年にして、なほたのし

り、る、けの集。

ひとの集のよろしき——。

悲しめど、悲しみ淡く

よるこべど、むさぼることなし。

若き日のばへみやを 悲しめる

歌こそは あはれなれ——。

麥の原に 木立ちまじり

風車 青空にめぐる

あゝ音や。時過ぎてなほ 聞え、

見わたしの國原は

髣髴に 人を哭かしむ。

どいつには生れざりしも

我は知る。りるけの愁ひ——。

我は知る。りるけの思ひ得ざりし

ちえこ、すらばきや人の

とこしへなる歎きを——

律(註34)

しづかなる夕に 出でて、

ほのかなる道を 往き來す。

かそかなるもの 來寄りて、

我が肩に ふれつつ過ぎぬ——。

わが耳や 何をか聞きし——。

我が心知らぬ ことばを

ささやきて ものぞ去りにし。

しづかなるゆふへの道に

かな律 一つ 穂を搖る。

(以下、佐藤春夫の解説。同書二六〇頁〜二六二頁)

獨逸には生れざりしも 律 釋逍空(1887—)

近代獨逸の最も異色ある詩人ライネル・マリア・リルケはこの詩人愛讀年久しいものと見える。年久しきに渉るのは「ひとの集ゆゑ」でそれに對して何の責任も悔恨も覺えず讀めるからである。老に到つても飽きないのは「悲しみて、悲しみ淡く 喜べど貧ることなし」彼の詩人の大雅の旨にかなひてゆかしい事をのべ、その作の一例として若き日のボヘミヤを悲しめる歌を擧げた。「麥の原に 木立ちまじり 風車 青空にめぐる」大きな風景を油繪のやうに色あざやかに一筆に描き出した。適切な場所にある「青空」の一語のため丘の麥生の黄ばんださまや木立のみどりなど目に見える。「あ

「音や。時過ぎてなほ 聞え」に深い感情をこめて「人を哭かしむ」の概念的に率直な句を眞實に力づけてゐる。「髻髻に」をオモカゲにと讀ませてまのあたりに浮び來るの意味に用ゐたのも國語のたのしい簡潔な表現で心にくい。このあたりがこの詩の所謂眼で、詩情をここに盛りあげてゐる。全篇淡々と歌ひ來り歌ひ去つて、何の奇をも弄せぬ言葉のうちに湛えられた思は潮の満ちてくるやうに人の心を高める。ゆたかにゆかしいしらべと眞率直截にのつぎならぬ句法の賜である。今までにこのやうな簡潔な手法を志した人が無いではなかつたがこの作者のやうにあざやかに成功した例は少ない。その古風な言葉づかひにかへつてハイカラなとさへ言ひたい清新の趣の横溢するのは決してリルケやボヘミヤのせいではない。「律」を見れば明らかである。

「律」靜かな夕かた心さびしさに堪へて外に出て草むらのなかのあるか無いかの細徑を（ほのかなる道）を往つたり來たりしてゐた。さびしさがたやすくまぎれないからである。ふと何やら自分の肩にさはつて何か囁いた者があつた。ふりかへつて見ると、かな菫（秋、黄色な花の簇出する蔓性の桑科の一年生の草）の穂（簇出した花）が一つゆれてゐた。といふ唯それだけの事である。（傍點は詩句のなかの含みを蛇足してみた。）ただそれだけの事であるが、詩の内容はこれだけの感動で十分である。さうしてこの一詩によつて人間と自然との古のままの親しみがもの見事にもたらされ歸つ

たやうな幽玄ながら健康な詩情が呼びさまされる。妙は簡古朴實の間にあつて、新らしい幽玄の門に「わが耳や 何をか聞きし——わが心知らぬ ことばを ささやきて ものぞ去りにし」のあたりに開かれてゐるらしいがこれ以上の、いやこれだけの解説さへ既に有害無益である。改めてひとり再讀三讀してこの詩の奥行をさぐり自ら會得すべきである。自ら悟らざれば遂に説得し能はぬ。思ふにそれは鳴立つ澤の秋の夕ぐれなどに類するところを近代的に捕捉したものであらう。純國産の優良な象徴詩と稱すべき劃時代の産物と思ふ。余は日本人だから日本の詩情を喜び、近代に生きてゐるから近代的な捕捉に同感し敬意を表する。我國の最新の詩境最高の詩技の一つである。

少し長くはあるが、今は絶版となつて容易に読むことが出来ぬ貴重な資料として紹介した次第である。まことに「人、人を知る」という言葉が如実に反映されている文章といえよう。我々は佐藤の解説を読んだ上で、道空の二詩を「再読、三読」すれば、清雅の境に遊ぶことができるであらう。

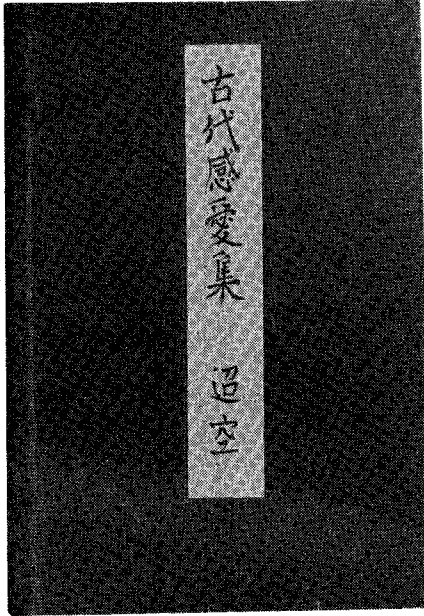
本年（一九八三年）は折口信夫歿後三十年に當る。四年後、一九八七年には釋道空・折口信夫生誕百年を迎えることになる。

本物のみが永遠の命を保つ。既に昨昭和五十七年四月より、第四次の折口信夫全集が中央公論社より刊行されている。しかし生誕百周年

の年には、ダンテ・アリギェーリの如き国家が主催する祝典はないであらう。だが生誕二百年、三百年の頃には、国家を挙げて稀有の詩人学者を顕彰していると筆者には思えるのである。

註

- (1) フィレンツェのオルネ美術館 (Museo Horne) 蔵の 84 × 54 センチの板絵。カリス (Chalis) の聖ヨハネ、聖ロレンツォ像とワシントン・ナショナルギャラリーのマトンナ像と共に多連衝祭壇画の一部をなしていたと推定されている。Bucci, M., *Giotta, Firenze* (1966), 40. 同書七七図にて聖ステファノ像を見ることが出来る。同書の日本版「ジョット」(東京、鶴書房、一九七二年) 第七七図も同じ図版である。ただし、解説はイタリア語版の翻訳ではなく新たに書かれている。また「聖ステファノ像」については、タイトルと所在場所寸法のみで、その他の説明はない。
- (2) *Dante, a cura di U. Paricchi, Roma* (1965).
- (3) *Ibid.*, 345-346.
- (4) 一九六五年四月二十日のダンテ国際学会 (Congresso Internazionale di Studi Danteschi) の開会演説より。
- (5) Eliot, T. S., *Selected Essays*, London (1934) より。
- (6) Mann, T., *Gesammelte Werke in Zwölf Bänden Band X Reden und Aufsätze 2, Frankfurt am Mein* (1960) より。
- (7) Esposito, E., "Prospetto cronologico della vita di Dante e dei tempi suoi," *op. cit.*, 23-27.
- (8) ダンテ『新生』東京、一九五一年、一五〇-一六頁。
- (9) 清新体派とは、ダンテを含むトスカーナの詩人をさし、カヴァルカンティ (一二五五頃-一三〇〇) はダンテの友にして、清新体派の領袖であった。白党に属し、フィレンツェより追放された。
- (10) 中世末期、イタリア諸都市はローマ教皇を支持する教皇派 (Guelph) と神聖ローマ皇帝を支持する皇帝派 (Ghibellin) との争いに巻き込まれた。フィレンツェでは一二一五年以来、両者の抗争が激しくなったが神聖ローマ皇帝フリードリヒ二世 (在位一二二〇-一二五〇) の介入で皇帝派が権力を握る。しかるにホーエンシュタウフェン朝の没落 (一二六八年) により、フランスより来たシャルル・ダンジュー (一二二六-一二八五) がローマ教皇の代官として勢力をふるった。フィレンツェも教皇派が勢いを占めるに至る。
- (11) フィレンツェ近郊の町ビストリアの名家カンチェリエーリ家が黒白両党に分かれて争っていた。その白党の一人がフィレンツェのチェルキ家と結ぶ。また黒党の一人がフィレンツェのドナーティ家に近いフレスコバルディ家と縁組。ためにピストリアの争いがフィレンツェに入り、チェルキ家が白党の、ドナーティ家が黒党の指導者となった。
- (12) プリオレ (prior) は「統領」とでも訳すべき語であるが、フィレンツェのプリオレは六人いたので、「統領」の訳語よりも、あえて原語で記した。一二八二年と八三年のフィレンツェ政治改革の結果、生れた制度で、もともと主要な同業組合 (le arti) の代表者三人で構成された。しかし、すぐ後に、フィレンツェ市が六区に分けられると各区より六人選出された。任期は二カ月だったので、永続的な仕事は出来なかつた。Cf. "priori," *Dizionario Enciclopedico Italiano*, 9, Roma (1970), 792. ダンテは一二九五年、医薬業組合に登録した。同業組合員でなければ、政治活動ができないという規定による。なお、この年にかねて婚約していたジェンマ・ドナーティと結婚したとする説もあるが、ダンテの結婚の年については定かではない。ペアトリーチェ歿後とする説が主流を占めるが、彼女の死の以前、一二八五年頃とするものもある。エスポジトの年表では一二七七年二月九日の婚約の記録に触れるのみで、結婚の年については何も書かれていない。Cf. Esposito, E., *op. cit.*, 24.



原本『古代感愛集』覆刻版の帙。色は鮮やかな葡萄色。文字は逋空私製木より取られた。昭和48年9月発行

- (13) ローマ教皇ボンファキウス八世は、教権を光被させようとした最後の教皇としてよく知られている。本文にも記したように一時はフランスと交友関係にあり、王弟シャルルの武力を借りてイタリアに君臨しようとしたが、結局ボンファキウスの政敵コロンナ家と仏王フィリップ四世が結んで一三〇三年のアナーニ事件（ボンファキウスが逮捕され、間もなく死歿）に至る。Cf. Hearder, H. & Waley D. P., *A Short History of Italy*, Cambridge (1977), 52-55.
- (14) エスポジトはB・ナルディの学説、即ち「帝政論」と「饗宴」の基本理念の共通性を根拠として、この年代に「帝政論」が書かれた可能性ありとする。
- (15) 初出は『ドルメン』昭和十四年一月号。『古代感愛集』に所収。本稿の引用は『折口信夫全集』第三卷四四～五一頁より。
- (16) 水木直箭『随筆折口信夫』一九七三年、東京、四〇頁。
- (17) 『古代感愛集』は、昭和二十二年三月、青磁社発行の初版(五十二篇)

の前に、『原本・古代感愛集』(五十三篇)とでも称されるべき幻の本があった。それは同じ青磁社より発行直前まで行っていたのであるが、不幸、昭和二十年三月の米軍空襲により社屋と共に焼失してしまった。しかし仮綴本が若干、逋空の手許に残ったので原本の面影を偲ぶことができたのである。(逋空は仮綴本を自分で製本し、柳田國男を始め親しい人に贈った。この幻の書は折口信夫歿後二十年を記念して、限定四百八十部が昭和四十八年九月三日に折口博士記念古代研究所より覆刻版として刊行された)

初版では、原本より戦争関係の十篇が削除され、別の九篇が補われた。この青磁社本に対し、昭和二十三年度の日本芸術院賞が与えられた。青磁社本所収の五十二篇を解体し、新たに二十九篇を加えて再構成した逋空は、昭和二十七年五月、角川書店より『古代感愛集』(二十一篇)『近悲傷集』(五十四篇)の二書を刊行した。『古代感愛集』所収の「月しろの旗」などは三篇が一篇第六章にまとめられている。これら二冊は構想を新たにした逋空苦心の作といふべきである。「折口信夫全集」第二三巻には角川本二冊が収められた。更に、口語詩を中心にした『現代檻襖集』が伊馬春部の編集により全集第三巻に初出。

- (18) 例えば、佐藤春夫の逋空絶賛の文章を含む『鑑賞抒情名詩選』(後出)の共著者、吉田精一は昭和四十一年一月に「近代詩と現代詩」という短文を『國文学・解釋と鑑賞』誌に書いている。同誌は「近代詩と現代詩——明治・大正・昭和の三代詩史」という特集を組んでいる。吉田の短い文に逋空の名が出て来ぬのは無理もないが、その後解説がなされる二十の詩集の中に逋空の作品はない。

- (19) 柳田國男『郷土生活の研究法』東京、一九三五年初版(定本柳田國男集第二五卷所収)に「新たなる國學」という一章があり學問救世なる小見出しもある(初版本一四七頁)。折口信夫は「新國學としての民俗學」を昭和二十二年に「國學院大学新聞」に発表した(『全集』一六卷)。

「生活の古典」という概念に対しては、「民俗学入門」なる副題をもつ
牧田茂『生活の古典』（角川選書）がある。

(20) 元版『折口信夫全集』月報一九号（昭和三十二年二月）に柳田國男の
「折口君の学問」という文章があり、次の個所が注目される。「……文字
以外の方法で、文字の裏、文字の陰から古いことを知らうとするのが僕
らの志す學問であつて、折口君もそれに同情を寄せて居てくれた。しか
し同じこの国の古いことを知らうとめざして居ても、僕は今現にあるも
の中なかから、それを手掛りにして手のとどく所までを十分知り、その上
で古い方へも出て行かうとしたのだが、折口君は幸か不幸か、古い方か
ら下りて来るやうな形をとつた」

(21) 『折口信夫全集』三〇巻に所収。なお、『遠野物語』に関する参考文献
については、栢木喜一「逈空会東北紀行」『釋逈空研究資料』二一九号（一
九八二年）五六頁を参照。

(22) 昭和五十七年十二月十三日に、筆者は府立今宮中学第五期生山田源之
助氏より今中時代の国語のノートを貸与してもらつた。これは折口信夫
青年期の重要資料であるので、近く発表する予定である。その時、山田
氏は筆者に次のように言われた。「この前に出来た逈空先生の歌碑の文
字は、自分が書いたのだが、のちの世の人があれを先生の字と思うかと
考かんえると夜もねむられなかつた。」実は大阪市生野区勝山南公園に歌集
『春のことぶれ』に収められている

小橋過ぎ、

鶴橋 生野來る道は、

古道

と思ふ 見覺えのなき

というお歌を山田源之助氏の書で歌碑にし、昭和五十七年十二月一日に
除幕式があつた。山田氏は「逈空詠、源之助書」という文字を入れたか
つたのだが、結局その希望はかなえられなかつたという。紙上を借り

て、後世のために、
生野歌碑の染筆者の
名をここに記した次
第である。

(23) 「三郷巷談」は「古
代研究」民俗学篇1
に収録された。全集
では第二巻と、拾遺
が第一六巻とに収め
られている。

(24) 萩原雄祐「釋逈空
先生を憶う」『短歌』
昭和二十九年一月
号、一〇〇〜一〇二
頁。

(25) 拙稿「鈴木金太郎
氏のこと」『釋逈空
研究資料』二九号、
四八〜五〇頁。

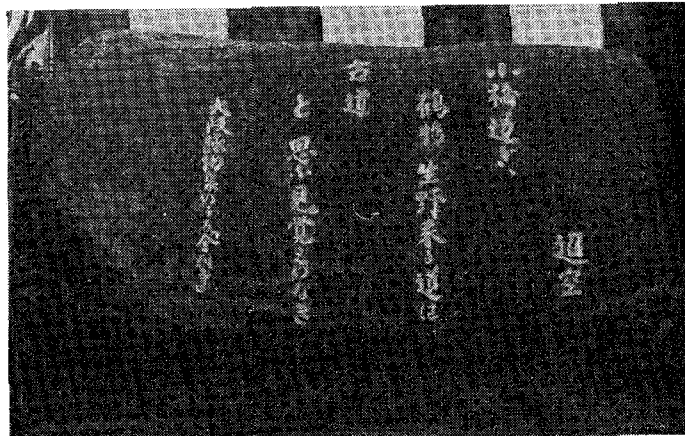
(26) 『折口信夫全集』
第四巻／第六卷。

(27) 大正十年三月より
五月にかけて三二回

に分けて連載。大正十四年四月、関連する他の論考を加えて大岡山書店
より同じタイトルにて刊行。『定本柳田國男集』第一巻に所収。

(28) 『全集』三二巻にてこれらの祭文を読むことができる。他に折口信夫
「三矢先生の学風」〔全集〕二八巻）を参照。

(29) 高崎正秀「三矢重松先生三十年祭顛末」『短歌』昭和二十九年一月号、
一一五〜一一七頁。



勝山南公園の逈空歌碑。山田源之助書

(30) 歌集「倭をくなく」より(『全集』二二卷) 八三頁。

(31) 「人間」二月号の詩を読んだ復員直後の伊馬春部の感激については『全集』二三卷あとがきを参照。

(32) 天明社本の詩(二〇三〜二〇五頁)には、全集本と段落、行間などに若干の異同があるが、そのままにした。但、明らかな誤植は訂正した。

(33) 初出は『三田文学』十九卷七号(一九四四年)。原本『古代感愛集』、初版『古代感愛集』を経て『近代悲傷集』に落ち着く。

(34) 原本『古代感愛集』が初出であるが、前記の如く幻の書となったので、世人の眼には触れなかった。『人間』昭和二十一年二月号掲載の「近代悲傷集」の冒頭に置かれた。その後、青磁社版『古代感愛集』角川版『近代悲傷集』に収められるという変転の道を「葎」は辿る。なお、本稿引用分のルビは「人間」所収のもので補った。

追記

一、ダンテ・アリギェーリに開する邦語文献については、『イタリア学文献目録』(京都大学イタリア学研究室・日本イタリア学都会館編集、日本オリベッティ株式会社発行、一九七七年) 五〜三頁に一九七五年末までの邦訳、論文等が収録されている。

『神曲』の最新訳としては寿岳文章訳(『世界文学全集』第二卷、集英社、一九七六年)がある。立派な口語訳であるが、筆者の好みから言えば、文語訳聖書の如き荘重な文体の山川丙三郎訳(岩波文庫に所収)に引かれる。

一、釋逍空・折口信夫についての文献目録は、『現代詩手帖』一九七三年臨時増刊「折口信夫・釋逍空」号、三八三〜三八九頁に長谷川政春編の労作がある。本稿引用の佐藤春夫の解説はこの目録にも未編。

一、『古代研究』『死者の書』の写真は樋口二三子氏撮影。その他は筆者

が撮影した。

一、『死者の書』初版青磁社本は水木直筋文庫架蔵のもの。その他の書物は筆者拙蔵。

一、次の予定は、ダンテ『神曲』と逍空『死者の書』の構想、内容、思想の比較、更にはダンテの詩作品と逍空のそれとの美と理念を対比することになるであろう。もって釋逍空の国民詩人たることを論証できれば幸いである。

以上